

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：14301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24653248

研究課題名(和文)戦後日本におけるアメリカナイゼーションと女性知識人の社会学的研究

研究課題名(英文)A sociological study of women intellectuals and 'Americanization' in post-war Japan

研究代表者

稲垣 恭子 (INAGAKI, Kyoko)

京都大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：40159934

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、戦後日本における女性知識人の社会的顕在化とその拡大・変容の過程を、アメリカナイゼーションと関連づけながら、社会学的な視点から考察することにある。具体的には、論壇やジャーナリズムを含む知的サークルの中で活躍した女性知識人の教育歴、活動領域、登場するメディアについての分析、及びその事例として石垣綾子らのライフコースや社会的活動の考察を通して、その社会的ポジションや役割を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This research aims to examine the process of social manifestation, expansion and change of women intellectuals in relation with 'Americanization' in post-war Japan. Through the analysis of their education, field of the activities and the media they played the active role in the intellectual circle, and the analysis of the life course of Ayako Ishigaki as a typical case, the social position and their role has been clarified.

研究分野：教育社会学

キーワード：女性知識人

1. 研究開始当初の背景

戦後日本の知識人の社会的位置や役割については、政治社会学、メディア史、歴史社会学、教育社会学等の各領域において、さまざまな角度から研究が蓄積されてきた。しかし、そうした研究の多くは男性知識人を前提にして進められてきた傾向が強かった。

一方、女性知識人に関する研究としては、個別の人物の思想や社会的活動に焦点を当てた伝記的研究、女性知識人のネットワークを掘り起こす女性史研究、女子高等教育の拡大とキャリアの実証的な分析を軸とする教育社会学研究等、個別的には優れた研究が行われてきた。

本研究はこれらの先行研究をふまえて、戦後、学会や論壇、ジャーナリズムを含む知的サークルの中で「女性知識人」が社会的に顕在化していく過程をアメリカナイゼーションと関連づけながら明らかにしようとする目的で出発した。

研究代表者は、本研究に着手するまでに、戦前、戦後の女性の教養についての研究を進めてきた。そのなかで、女性の教養文化が、旧制高校や帝大を中心とする男性の教養文化とは違って、日常生活から身体作法、社交を含む広がるをもつものであったこと、それが「上品さ」と同時に「軽薄さ」や「表層的」といった両価的な社会的視線の対象であったことを明らかにした。

また、共同研究のなかで、日本の論壇の変化についてアカデミズムとジャーナリズムの関係のなかで捉えなおす視点について検討してきた。

こうした研究背景から、戦後アメリカナイゼーションと女性知識人の関係について、論壇活動を中心に捉えなおすことを目的にすえて研究をスタートさせた。

戦後の広範なアメリカナイゼーションは、デモクラシーを表象する存在として、女性知識人とくに「アメリカ帰り」の女性知識人を顕在化させたが、そこにも女性の教養や知識人としての位置づけに対する両価的な評価が反映していたようにおもえる。こうした傾向は、知的サークルと大衆ジャーナリズムの関係のなかで男性知識人を含むそのなかで、戦後の女性知識人の社会的顕在化をアメリカナイゼーションと関連づけてとらえるのが、本研究の重要な視点である。

以上が、研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

本研究は、戦後日本における女性知識人の社会的顕在化とその拡大・変容の過程を、アメリカナイゼーションと関連づけながら、社会学的な視点から明らかにすることを目的としている。

特に、女性知識人が論壇やジャーナリ

ズムを含む知的サークルにおいてその存在が顕在化するようになる 1950～1960年代以降に焦点をあて、その社会的ポジションや役割を、より広い政治的、社会的文脈のなかで検討し直すことによって、女性知識人の社会的位置や役割を実証的に分析・考察することが直接の内容である。

本研究によって、これまで男性知識人を中心として進められてきた知識人研究、論壇研究のなかで、女性知識人という視点から考察を加えることによって、より重層的な分析が可能になる。またそれによって、女性史、知識人論、女子高等教育論などの領域を横断し、女性知識人の社会学的研究を進めていく土台をつくることができると考えている。

3. 研究の方法

具体的な研究方法・手順は以下のとおりである。

平成 24 年度

戦後の学術・総合雑誌、女性向け総合雑誌等の論壇メディアに登場する女性知識人に関する資料の収集と分析を行い、戦後女性知識人の全般的な特徴について考察する。

(1) 戦後日本のアメリカナイゼーションと知識人についての先行研究、資料を収集し、検討した。その上で、女性知識人研究の枠組みと課題を明確化した。

(2) 占領期に創刊された女性雑誌を対象として、女性の意識や生活とアメリカナイゼーションの関係について分析・考察した。

(3) 論壇メディアを中心に、女性知識人の特徴や位置づけについて分析・考察した。分析対象とする雑誌として、主に『思想』『思想の科学』『中央公論』『世界』『婦人公論』『文藝春秋』を取り上げ、それぞれ女性執筆者の割合、登場頻度、記事内容などについての基礎的な分析を行った。

(4) 特に登場頻度の高い女性知識人を抽出し、学歴、階層、出身地、職業キャリア、論壇での活動領域などの観点からいくつかのタイプに分類し、より詳細な分析・考察を行った。

平成 25 年度

24 年度の結果に基いて、さらに留学経験をもつ女性知識人に焦点をあてて、戦後論壇や知的サークルにおけるその社会的位置について分析・考察した。

(1) 戦前期から戦後にかけての女性の留学(主にアメリカ、イギリス、フランス)の実態について、可能な資料を収集し、その特徴や帰国後のキャリアについて分析した。また、国内の大学・短期大学における女子学生の学部・学科選択の動向について、資料の収集と分析を行った。

(2)戦前期(主に1920~1940年代)にアメリカ留学経験をもつ女性知識人について、自伝、評伝、日記等の個人資料の収集を行い、留学までの経歴から留学先での生活、帰国後のキャリア、論壇活動、社会的活動等について分析・考察した。

平成26年度

24、25年度の分析結果をまとめ、戦後日本における知的サークルにおける「アメリカ帰り」女性知識人の社会的位置と役割について考察した。その過程で、とくに「アメリカ帰り」の女性知識人の個人資料をさらに補足するとともに、1980年代以降の女性知識人の動向についても分析を進め、現代日本の論壇、知的サークルにおける女性知識人の位置を考察した。

4. 研究成果

研究から得られた知見・成果は以下のとおりである。

(1)戦前期から継続して活躍した女性知識人(「戦前派女性知識人」と、戦後になって活躍が顕著になった女性知識人(「戦後派女性知識人」)では、教育歴、活動領域、メディア等に違いがあること、特に戦後は「アメリカ帰り」の女性知識人・文化人が戦後日本のアメリカナイゼーションの表象としてとらえられ、メディアでの活躍が目立つようになったことが、各種のデータ・資料の分析から明らかになった。

(2)戦後の論壇で活躍した「アメリカ帰り」女性知識人・文化人の代表的な人物のひとりである石垣綾子に注目し、著書、雑誌記事、テレビ出演等の資料の収集、及び写真、日記、手紙等の個人資料の収集・整理と分析を行った。

特に、戦前のモダニズムとアメリカ生活での経験が、戦後の文化状況のなかでどのように受容されていったのかに焦点をあてて、戦後の論壇活動の考察を行った。その結果、政治、経済、国際関係といった時事問題から女性問題、悩み相談などの日常生活に関わるテーマまで含む幅広い論壇活動が、アメリカナイゼーションに対する両義的な視線を受けるものであったこと、「お茶の間論壇」の成立と拡大という論壇の変容と対応するものであったこと等が明らかになった。

(3)これらの分析結果を総合すると、女性知識人・文化人の社会的顕在化と受容の過程は、戦後の価値の広がりやジャーナリズムの拡大と対応しつつ、論壇で独自の位置づけをつくったことが明らかになった。

(4)これらの研究の成果については、論文として発表すると同時に、講演、口頭報告として公表した。

* 「女性文化人のさきがけ—石垣綾子とそ

の時代」和歌山県太地町立石垣記念館、2015年3月30日

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

- 1 稲垣恭子「『師弟関係』の社会史 第6回 兄弟子という存在 落語の世界」『内外教育』 査読無 第6406号、2015年3月31日、12~13頁
- 2 稲垣恭子「『師弟関係』の社会史 第5回 古典芸能の世界—伝統的な師弟関係」『内外教育』 査読無 第6401号、2015年3月10日、12~13頁
- 3 稲垣恭子「『師弟関係』の社会史 第4回 疑似師弟関係」『内外教育』 査読無 第6397号 2015年2月24日、8~9頁
- 4 稲垣恭子「『師弟関係』の社会史 第3回『背のび』から『まなび』へ—『師弟関係』の消失」『内外教育』 査読無 第6394号、2015年2月10日、12~13頁
- 5 稲垣恭子「『師弟関係』の社会史 第2回『師』との出会い」『内外教育』 査読無第6390号、2015年1月27日 12-13頁
- 6 稲垣恭子「『師弟関係』の社会史 第1回『まなび』と『師弟関係』」『内外教育』 査読無 第6386号、2015年1月13日、6~7頁
- 7 稲垣恭子「お稽古からたしなみへ~女学生文化の系譜~」『子ども学』第16号、甲南女子大学国際子ども学研究センター、査読無 2014年3月、109-132頁
- 8 稲垣恭子「財界人・文化人の『師弟

関係』 「私の履歴書」の分析から」
『京都大学大学院教育学研究科紀要』
査読有 第59号、 2013年3月
1 - 23頁

〔学会発表〕(計 2 件)

- 1 稲垣恭子 (Co-organizer) international conference "Childhood, Education and Youth in Imperial Japan, 1925-1945" Clock Tower, Kyoto University. (Kyoto)
11, Jan. and 12, Jan. 2014
- 2 稲垣恭子 (基調講演) 「ほつれゆく家族物語のあとに テレビ小説『あまちゃん』にみる確執と和解」第60回コルモス研究会 (現代における宗教の役割研究会)、京都国際ホテル (京都府京都市) 2013年12月26日

〔図書〕(計 5 件)

- 1 町村敬志・荻野昌弘・藤村正之・稲垣恭子・好井裕明編 『現代の差別と排除をみる視点』(『差別と排除の [いま] 』) 明石書店、2015年3月17日
第4章「ピュアという鏡」
101 - 135頁
- 2 稲垣恭子「自伝にみる師弟関係—『私の履歴書』の分析から」(第8章) 齊藤利彦編 『学校文化の史的探究』東京大学出版会、2015年2月、207 - 231頁
- 3 竹内洋・佐藤卓己・稲垣恭子編 『日本の論壇雑誌 - 教養メディアの盛衰 - 』

創元社、2014年4月
第4章「『婦人公論』 - お茶の間論壇の誕生」111 - 131頁

- 4 稲垣恭子編 『教育における包摂と排除 もうひとつの若者論』(『差別と排除の [いま] 』) 明石書店、2012年9月
序章「教育と若者の現在 包摂の「なかの」排除をめぐる」8 - 18頁
- 5 E.M. ホーヴァット、E.B. ワイニンガー & A. ラロー 稲垣恭子訳 「社会的紐帯から社会関係資本へ 学校と保護者ネットワークの関係における階層差」H. ローダー他編、苅谷剛彦、志水宏吉、小玉重夫編訳 『グローバル化・社会変動と教育2』東京大学出版会、2012年5月、
37 - 59頁

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

稲垣 恭子 (INAGAKI Kyoko)
京都大学・教育学研究科 (研究院)・教授
研究者番号：40159934